

< 日本税理士会連合会会長賞 >

『ゼイ』沢

白河市立白河第二中学校

3年 目黒 恭涼

7年前、僕の目の前に広がった異様な光景。崩れ落ちた建物、ねじ曲がった道路、品物がないコンビニエンスストア……。当時7歳だった僕の脳裏に焼きついた衝撃は、今も鮮明によみがえる。しかし、今の僕の周りには、つい7年前に未曾有の被害を受けたとは想像できない、平和で美しい世界が広がっている。ともすると、7年前のあの光景を忘れてしまいそうになるほどだ。僕が住む福島県がここまで復興することができたのは、たくさんの義援金、延べ20万人ものボランティアの方々之力、そして、税金のおかげである。

東日本大震災は、「激甚災害」に指定された。「激甚災害」に指定されると、災害復旧事業の補助率が何割か上がるそうさ。この仕組みを行うにあたって使われている財源はどこにあるのかと考えてみると、税金であることに辿り着く。例えば、僕自身がコンビニエンスストアで飲み物やお菓子を買うなどするだけで、「消費税」という税金を払うことになる。その税金が被災地の補助に使われ、復興を早めることにつながっていたのかもしれない。そう考えると、自分も災害復旧に一役買っていたのだと、なんだか少し嬉しく感じた。またそれは、同じような仕組みで、日本国中の人々が税の力で僕達を助けてくれていたのだということでもあり、そう思うと、ありがたさとともに、自分一人だけで困難に立ち向かわなくてよいのだという心強さも感じられた。

そもそも、税の歴史を辿ってみると、人が集団で共同体となって生活するようになった古墳時代からあったようだ。それは、大昔の人々も、自分一人の力

で生きていくよりも互いに助け合った方が生きやすいと感じたからだろう。現代では、「なぜこんなに税金を払わなければならないのか。」と不満を漏らす人もいるが、これは自分が税金を取られるという一面だけを見ているのであって、他の人が払っている税金に助けられて自分もよりよい生活ができているという事実、つまり、税のそもそもの成り立ちを考えれば、自分の負担に対する見方も少し変わるのではないか。

実際のところ、日本の税の負担率は、世界の諸外国と比べて低い。しかし、負担率の高い国は、その分、社会福祉が充実している。「助け合い」の実現と自己の負担過重を考えると、どちらがよいとは一概にはいえない。大切なのは、「自分の払った税が誰かの役に立ち、誰かの払った税が自分のためになっている」ことを共通理解することと、「より効果があり、かつ無駄のない税金の使い道」をみんなで真剣に考えていくことだと僕は思う。

僕もまもなく大人の仲間入りをする。大人になって収入を得るようになれば、今以上に税との関わりが深くなる。その時には、ただ義務として税を納めるのではなく、税を通して他者や社会とつながっているという思いを持ち、自分事として真剣に税の使い方を考えながら、社会の一員として生活していきたい。